奥さんと旦那さん

アレナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
奥さんと旦那さん

【Ｎコード】
Ｎ７５２９Ｙ

【作者名】
アレナ

【あらすじ】
「奥さん。唐突ですが、離婚をしましょう」
旦那さんの一言から始まる、恋物語。
＊＊本編完結済み。番外編と後日談を更新中＊＊

1話

「奥さん。唐突ですが、離婚をしましょう」
「まだ結婚もしてないのに、ですか。旦那さん」

私たちが互いを「奥さん」「旦那さん」と呼ぶようになった経緯は、今さら定かではなかった。

私たちは幼いころからずっとお互いを結婚相手だと知っていたし、それを疑問に思ったことは、２０数年生きてきた私の人生の中で、ただの一度もなかった。旦那さんにしてもこの間「君との結婚を疑問に思ったことは、僕の３０数年の人生の中で、一度もありませんでした」と言っていたから、私はその言を信じることにする。こんなことを言うとまた「あんたたちは似た者同士ね」と母親にあきれ顔でため息をつかれるのだろうが、結婚を決めてきた張本人のセリフではないと思う。

とにかく私たちは多分ずっと前からお互いを「奥さん」「旦那さん」と呼び合っていた。まだ結婚する前だとしても。

さて、そんな私の旦那さん（予定）は、物静かな大人の男で、とても丁寧な物腰の人だ。私が旦那さんに敬語で話すのは彼が年上だからだが、彼のそれは癖である。

ファッションにはこだわりもないかわりにそれなりに見た目を気にするらしく、割と安価ながら質がよくスタイリッシュな服をなんでも着こなす。スタイルと顔がそこそこいいせいもあるのだろうけど、そういえば旦那さんはバレンタインに、義理チョコにまじって本気の本命を2、3個そうとは気付かず（気づいてたのかもしれないけど）もらってくるタイプだった。

かくいう私はバレンタインに誰かにチョコをあげたことなんてな

い。父親は甘いものが嫌いだったし。旦那さんにあげるなんて考えは、脳裏をよぎっても実行に移されることはなかった。彼は毎年たくさんのカカオにまみれてその日を過ごしている。

それから、旦那さんは優しくて、あまり表情を変えることのない人だ。私が泣こうが喚こうが、そんなに表情を変えることなくずっと隣に座ってハンカチを準備していてくれる。抱きしめたりしないところが旦那さんだ。彼は古風な人だから。そして私が落ち着いたと見るや、ハンカチをそっと手渡してどこかへ去っていく。だから多分、旦那さんは私が今までの人生で経験してきた何十回という青春の涙の理由を、知らない。

たまに見る彼の笑顔はとても可愛いのだけれど、それを旦那さん本人に言ったことはない。言ってみたらどうなるのか、と少し妄想したことはあったけれど、頭の中の彼はいつもの冷静な顔で「ありがとう奥さん」と言っていた。

旦那さんの好きなものは猫とジャズミュージックと、自分の仕事。それから苺ジャムののったヨーグルト。彼の朝ごはんは変わらないのだ。ちなみに私がその朝ごはんを食べているところを目撃したことはない。これは旦那さんのお母様のお話で知ったこと。彼と私が一夜を共にしたことはないのである。

そんな旦那さんがちょっとばかり唐突な発言をするのは、別段不思議な事じゃなかった。割と「ちょっとスイスに行ってきますね」とか宣言してそのまま音信不通になる、だなんてことはある方だし。

だからあの発言に対しても私は、割と冷静に突っ込みを入れてしまったわけなんだけれど。

「そうですね。離婚は成立しませんね。結婚していないんですから」

「まぁこんな呼び方しといてなんですけど、私たちまだ婚約者ですからね」
本当は旦那さん自身からプロポーズされていないから婚約者でもない。いや、告白もされていないから恋人でもない。当然か。私たちは唇を重ねるどころか抱きしめあうこともないんだから。これを恋人などと呼んだら世間の恋人から怒られる。

とまぁ私がその辺をうまく脳内で処理しているすきに、旦那さんは何事かの考えに至ったようだった。
「驚かないんですか、奥さん」
そうか。ここは驚くところか。当然だ。私が２０数年間、旦那さんが３０数年間疑わなかったと言っていたはずの結婚に、今ようやく疑問が呈されたのだから。私はここで驚くべきなのだ。しかし、なんて？
「どうしたんですか、いきなり？」
とりあえず驚きついでに疑問をぶつけてみた。すると旦那さんは「うーん」と少しだけ眉をしかめる。これは珍しい。旦那さんの思案顔だ。
「僕はね、常々君との関係がこれでいいものかと、思っていたのです」
「はい」
「だってそうでしょう？生まれた時からの許嫁だなんて、そんな時代錯誤なお話。今２１世紀ですよ？」
「そうですね。昭和の悲恋みたいですもんね」
「ええ。だからね、考えていたんです。もしかして、君との関係を改めるべきなんじゃないかって」

それは、少しだけ、私にショックを与えた。
そうか、旦那さんそんなこと考えていたのか。私がなんの疑問も持たなかったこの結婚に、旦那さんは疑問を持っていたのだ。嘘ま

で付いていたのだ。あの真面目な人が。それだけ真剣に考えていたということなのだろう。

私たちの結婚は、親同士の道楽で始まった結婚だ。昭和の悲恋みたいにお互いの家に利益がもたらされたり、損害を与えたりするようなものじゃない。私たちが嫌だといえば、すぐにでもそんなことは関係者の脳裏から消えさることのできるようなものだった。

「だから、離婚ですか？」

「ええ。うまい言い方ができなくてそういう言い方になってしまいましたが、つまりはそういうことです」

なるほど。

つまり旦那さんは、端的に言うと婚約解消を申し入れているわけだ。

そう、か。

それは、もちろん受け入れるべきことだろう。私たちの間に、それを断る理由はない。

なのに。

なんで、少し、おなかの奥の方が、少しだけ、じくじくと痛むのだろう。

「もちろんです、旦那さん」

「そうですか、ありがとう、奥さん」

私が笑顔で了承すると、珍しく旦那さんは微笑んだ。あぁ、やっぱり可愛い。旦那さんの笑顔は、心が和む。だけど、この笑顔を見ることもなくなるのかと思うと少しさみしかった。私の２０数年間の一部が、今、どこか遠くへ行ってしまうのか。

「あぁ、朝からすみませんでしたね。それでは、僕は仕事へ行きます。君も早くしないと遅刻しますよ」

そう旦那さんが私に告げて踵を返した時、私は時刻が家を出る時間になっていたことを知った。なんで朝早くから旦那さんは家に来たんだ。恨めしく思いながら、私は準備もそこそこに駅に向かって走り出した。

旦那さんの姿はもうなかった。

2話

「珍しいわね、あなたがギリギリだなんて」
始業時刻5分前。いつも30分前にはいる私にしては確かに珍しいかもしれない。笑う先輩に挨拶をしながら、私はデスクにつく。
「なにかあったの？今朝」
「ええ、少し」
まさか未婚の私が「離婚してきました」なんて言えるはずもなく（あぁ、でも旦那さんなら言いそう）、私は曖昧に笑った。先輩も「大変だったみたいね」と曖昧に笑いながらPCに視線を戻した。

淡々と上司からまわされる仕事をこなし、やっとお昼休みになったころ、私は財布だけを持って同僚たちと社員食堂へ向かった。食堂はいつものように混んでいて、少し今日は遅かったか、と皆で困ったように視線をぐるりと巡らせていると、私たちに向かって手を振っている男性社員たちと目が合った。
「こっちおいでよ。席あるから」
「ありがとう」
口ぐちにお礼を言って、狭いそのスペースに腰かける。彼らは同期の社員で、今は営業部にいるはずだった。営業の人間はとにかく話すのが上手い。口べたな私は聞いてるだけで十分なのだが、そういえば旦那さんも口数は少ないのに、私とは会話は成り立っていたように思う。

「……聞いてた？」
「え、えっ？なに？」
私が思考をめぐらしている間に、話は違う方向へ飛んでいたみたいだった。目の前に座る男性社員が困ったような顔で私の顔を覗き

込む。
「大丈夫？具合悪い？」
「ううん、なんでもない」
「……そう？それなら今日の夜の飲み会の話なんだけど」
いつのまにやら私は、出会いを求める餓えた同僚たちに巻き込まれ、営業部との飲み会に参加することになっていた。私は離婚した日にコンパに行くような女なのだ、と思うと少しおかしくなった。

5分前に席に戻り、財布を鞄にしまおうとしたとき、携帯電話が光っているのが見えた。メールあり、の表示だった。
『旦那さん』と携帯電話には書いてある。この表示もそういえば変えなきゃいけない、と思いながら急いでメールを開くと、簡潔な一文があった。
―今晩、食事でもいかがですか。
離婚記念日の食事だろうか。旦那さんは、あんな人なのに実は記念日大好きな人だった。誕生日もクリスマスもバレンタインも、楽しみにしてしまうような人。そこがまた可愛いと思うのだが、私は生憎とあまり記念日に興味がなかった。
なのに指は私の脳の介入を許す間もなく「はい」と返信していた。
すぐに返事が返ってくる。
―それでは、19時に駅で待ち合わせましょう。
楽しみにしています、とある文の横に、私の名前があった。奥さん、ではなかった。
私の名前、覚えてたのか、という奇妙な安堵とともに、寂しさが込み上げてきた。私は、自分のアドレス帳に、彼の名前を登録しなおす。そこで始業時間になった。旦那さんへは、返信できなかった。

私の狭い人脈の中で、飲み会の参加者の代わりを探し出すのは困難かと思われたのだが、そんなことはなかった。むしろ候補はあまりあるほどいて、誘うことができないという事態にまで陥った。結

局女子トイレでは壮絶なるジャンケン大会が催されたのだが、途中で私は時間になってしまったので勝者を見届けることはできなかった。

「来ないの？」
会社の玄関で、昼間の男性社員と出会う。また、困ったような顔をしていた。営業の人は、ルックスがいいことで有名だ。困った顔なのにサマになる。
「ごめんなさい。急用で。大丈夫、代わりは探しておいたから」
血を血で洗うようなジャンケン大会のことは伏せて、「安心してね」と微笑む。困った顔は解消されなかった。
「それじゃ意味ないんだけどな」
「え？」
彼のつぶやきは、アフターシックスを迎えた会社員たちのざわめきにかき消された。私はちらりと時計を見て、遅刻寸前であることに気づく。旦那さんは神経質ではないが、ルーズな方でもない。できる限り時間より少し前には着いていたい。
「ごめんなさい、私そろそろ行かないと。お疲れ様です」
「お疲れ様。また今度食事でも行こうよ」
「ええ、ぜひ」
婚約者はいなくなったのだし、食事くらいは許されるだろう。そう思いながらも、無意識に私はずっと旦那さんのことを考えていた。

駅に着くと、スーツ姿の旦那さんが、壁にもたれるようにして待っていた。しまった、と思ったときには旦那さんとばっちり目が合っていて、私は彼に駆け寄った。
「ごめんなさい、遅くなりました」
「いいえ、時間どおりです……来てくれて、よかった」
ひどく安心したように彼が息をつくから、私はなんだかどぎまぎした。はいってメールしたのに、と思うが口には出さない。別にそ

れで問題はないから構わないのだ。

「それで、どうしますか？よければ私、夕飯作りますけど」
「僕から誘っておいてそれはないと思いませんか」
「そうでしょうか」
「そういうものです」
旦那さんにそんな甲斐性があったとは驚きだ。食べられれば何だっていいと思っているのかと思っていた。旦那さんは時計を確認して、「ちょうどいいですね」とひとりごちた。
「レストランを予約しています。君はイタリアン、好きでしたね？」
「はい」
「ならば行きましょう」

駅から歩いてすぐのその店は決して高級店ではないのだけれど、とても雰囲気のいい、おしゃれなレストランだった。イタリア語でいえばリストランテか。どうでもいいようなことを思いながら、私はウエイターさんと旦那さんの後に続く。

乾杯は、ワインでした。私も旦那さんも、お酒はとても強い方で、旦那さんはよく、酒豪と名高い私の父親を相手に晩酌をしていた。ワインを開けた時も、旦那さんはどこか嬉しそうだった。今日は旦那さんの表情が割とよく変わる。こんなこと、２０数年間のうちで何回しかないことだろう。
「乾杯しましょうか」
「はい」
ソムリエさんに注いでもらって、私たちはワイングラスをかかげた。
「離婚記念日に乾杯しましょうか」
案の定、記念日大好き旦那さんはそんなことを言った。私はそれに「はい」とうなずく。「乾杯」のあとに旦那さんが私の名前を呼

ぶから、私も旦那さんの名前を呼んだ。キン、とグラスから涼しげな音がした。

アルコールを摂取したのに私の胸はなぜかすっと冷めていき、ワインの味はあまり分からなかった。

3話

料理はとても美味しかった。だけど何か物足りなかった。こんなこと初めてだ。今まで何度も旦那さんとは一緒に食事をして、その都度、それがたとえどんな料理でも美味しく感じなかったことはなかったのに。物足りないだなんて、思ったことなかったのに。

何が原因かもわからないまま、私と旦那さんは帰り道をゆったり歩いている。

「今夜は月がきれいです」

「そうですね」

「満月ですか？」

「あと数日でしょうね」

他愛もない話をする。これは私たちの日常だったはずなのに、なぜか私は極度に意識してしまっていた。こんな会話でいいのだろうか？

「また食事に行きましょうね」

「今度は私が作ります」

「楽しみにしています。和食がいいですかね」

「わかりました」

なんだか夫婦の会話みたいになってしまった。今日は離婚記念日だったのに。というか離婚記念日っておかしくないだろうか。私たちはそもそも結婚していない。婚約もしていない。してるのかもしれないけれど、恋人ではなかった。でも、すべてが今日の朝、白紙に戻った。

……何を考えているんだろう、私。ぐるぐるぐるする。気持ち悪い。何を後悔しているんだろう。何を、何が？

「大丈夫ですか」

「あんまり」
「休みましょう、そこに公園があります。歩けますか？」
私の顔色を見たらしい。旦那さんがまたも珍しく心配そうに私を覗き込んで尋ねてきた。いつもなら大丈夫だと答えるはずの私はなぜか今日に限って甘えてしまって、私は旦那さんに肩を抱かれながら（ただしロマンチックには程遠い）公園の中にふらふらした足取りで向かった。

水を飲み、ベンチに腰かけると少しだけ落ち着いた。
「疲れていたところにワイン数杯でしたからね。悪酔いしたのかもしれません」
「でも、私強いですよ？」
「知っています。だけど、体調などでも変わってきますから」
あやされるような穏やかな口調で言われて、私はまた落ち着いた。思えば久し振りのお酒だった。最近は仕事が忙しかったし、飲みに行くこともなかった。それになんだか今日はとても飲みたい気分で、つい口に運びすぎてしまったのかもしれない。
「すみません。気づいてあげればよかった」
「私の自業自得ですから、気にしないでください」
旦那さん、と口に出しかけてすんでのところでとどめた。危ない。この人はもう私の旦那さんではないのだ。
私はもう、この人の奥さんではないのだ。

「……！」
気づいたら、視界がものすごくぼやけていた。鼻の奥もツンとする。理解したくはなかったが、私はなぜだか泣いていた。それも号泣だ。近年まれにみる大泣き。こんなに泣いたのは、2年前、近所の家で飼っていた犬のペスがなくなったとき以来だ。小さなころから可愛がってきたペス。あの時もそういえば旦那さんが隣にいてくれた。

「あ、りがと、う、ご……ざ、ま」
そしていまみたいにハンカチを準備して無言で待っていてくれたのだ。旦那さんは変わらない。ずっと。ずっと変わらない。
頭が良くて、静かで、ちょっと唐突だけど丁寧で、誰より優しい。

そうか。
なんで私、こんなに悲しいのかわかった。

いつも旦那さんは私が泣いた理由を聞こうとはしなかった。友達とけんかした日も、大会で負けた日も、祖父の亡くなった日も。
でもきっとわかってたんだと思う。
だけど今回ばかりは、何で泣いているのかなんて旦那さんにはわからないはずだ。私だって、今、ようやくわかったのだから。
私、旦那さんのことが好きだったんだ。

すべてが終わったその日に気づくだなんて私はなんて間抜けなんだろう、と思ったが、そういえば私は昔から、テスト終了のチャイムと同時に答えを書く欄をひとつずつずらしていることに気づくようなタイプだった。今さらなのだ、結局のところ。

いつもならハンカチだけ置いてどこかに行ってしまう旦那さんも、今日はずっとそばにいてくれた。ふらふらしている私を置いて帰るなんてできなかったらしい。1時間ほどしてようやく私が（旦那さんにとって）謎の涙を落ち着かせると、旦那さんはぽん、と頭を一つ撫でてくれた。
「落ち着きましたか」
「はい……」
「君が酔ったところなんて久しぶりに見ましたね」
軽口をたたきながら、くす、と小さく笑う音がした。私は鼻をかんでいて見なかったのだけれど。あぁ、もったいないことをした。

もう一度、とリクエストしたら呆れられるだろうか。
「さぁ、それでは帰りましょうか。明日がいくらお休みでも、あまり遅くなるものではないから」
「はい。ご迷惑をおかけしました」
「とんでもない」
旦那さんは優しい。優しすぎる。多分私のことを、これから先もこうやって、なんでもないような顔でかまってくれるのだろう。旦那さんはそういう人だ。きっと私が結婚するまでそうしてくれるのだ。他の、誰かと。

彼に送ってもらって家に帰る。次の約束はしなかった。けれど「また連絡しますね」と言われた。しかも、私たちの家は徒歩３４秒の近さだ。通信機器を利用しなくても、会える距離にいる。
リビングにいる母親に「ただいま」と言うと、彼女は目を潤ませながら「おかえり」と言った。視線はテレビの中の女優を見ている。流行りの恋愛ドラマらしい。私は見たことがなかった。
「何、泣いてるの？」
「ヒカリが、ユウヤの幸せを、願って、別れを、ね」
見たことがないって言ってるのに。そんなことはお構いなしで母はそれまでの経緯を語っている。どうやら今はヒカリがショウコに向かって、恋人と別れた報告をしているらしい。
『未練なんて、あるに決まってるわよ……どうしたらいいの……？』
ヒカリが問う。
それに対してショウコが言う。
『そんなの簡単よ。忘れるの。無理やりにね。連絡もとらない。逢わない。だってそうでもしなくちゃ、辛いままじゃない』

その日から、私の携帯電話は、旦那さんを拒否することになった。

4話

それから2週間たった。私は旦那さんと一度も遭遇していない。徒歩３４秒なのに、結構すごいことだと思う。前までは、割と帰宅時間や出社時間が重なって、駅まで一緒に行ったりすることも多かったのだが。ちなみに連絡は拒否済み。家にかかってきた電話は、すべて私につなぐ前に切られている。母親には「喧嘩でもしたの？」と聞かれたが、私が何かを言う前に「結婚前の大ゲンカは必要よね」と妙に納得した表情でうなずいていた。父親との青春でも思い出しているのかもしれない。そろそろ真珠婚も迎えるというのに、一体いつまでラブラブでいる気なのだろう、私の両親は。

正直なところ、私は少し両親がうらやましかった。

一体どのくらい天文学的な数字なのだろう。好きな人と結婚できる可能性というのは。好きあっている人と、結婚できるというのは。私は旦那さんのことが好きだ。でも旦那さんはそうじゃない。結婚したって辛いだけなのだ。そもそも、旦那さんの方から「離婚」を切り出されてしまった。

ショウコのウソつき、と思う。

逢わなくたって、連絡もとらなくたって、辛いままじゃないか。だって、無理やりにでも忘れられない。

そうして今日も会社へ行こうと玄関のドアを開けた瞬間、徒歩３４秒、走ったら１３秒の斜め向かいの家をふと見てしまった。旦那さんのおうちだ。私が生まれたときから旦那さんの一家がそこには住んでいるのだが、１０年前から旦那さんだけが住んでいる。貿易関係の仕事をしている旦那さんのご両親が、ふたりで外国に移住しているからだ。１年に数回帰ってくるし、私もそのたびに可愛がら

れてはいるのだが、普段、旦那さんは一軒家に一人暮らし。
……なんという好物件なのだろう。お買い得だ。私と「離婚」した今、旦那さんは完全なるフリー。きっとモテまくっているのだろうなぁ、と下世話な想像をしては、胸の痛みをこらえていた。

そんなとき、ガチャリと妙に大きな音がした気がした。身をすくませていると、そのドアからなんと旦那さん本人が現れる。少しだけ、目があった気がした。もちろん旦那さんの家なのだから旦那さんが現れるのは当たり前なのだが、妙に気まずくて、私は即座に目をそらすと、そちらとは反対方向に小走りで向かった。
駅が反対方向だということに気づくまで、私はずっと走り続けていた。

「おはよう」
「おはようございます」
「なんか疲れた顔してるね。大丈夫？」
「少し残業が多かったからかも」
少しだけいつもの時間とはずれたものの、遅刻することなく出社できたことにホッとしていると、エレベーターで営業部の彼に出会った。いつもどおりのさわやかさを今は少しだけ、気づかいに変えて私を覗き込んでくる。私にはその顔色の原因がわかってはいたのだけれど、本当の理由は言わなかった。最近は残業続きで参っていたのも、正直なところ、ある。

「あ、そうだ。連絡先、教えてくれない？俺、君のだけ知らなかったんだよ。ほら、今度夕飯誘うって言ってただろ？」
唐突にそう言われ、はい、と答えた。実はそんなことすっかり忘れていたのだけれど。
「じゃあ、後で社内メールにでも」
「あー、じゃなくて、そうだな、じゃあ昼一緒にどこかに食べに行

こう。その時教えてよ」
「いいですよ。じゃあまた後で」
エレベーターが私の降りる階を告げていたので、私は男性社員と別れて自分のデスクへ向かった。そういえばこの前の飲み会は、誰がジャンケン大会に勝利したのだろう。その時はあとで聞いてみよう、と思っていたのだが、生憎お昼にそのことをすっかり失念しており、思いだしたのは帰りの電車の中だった。

今日もまた残業を終えて家に帰ってくると、玄関のドアノブに回覧板がかかっていた。時刻は１１時過ぎ。父も母も気づかなかったのだろうか。いつもなら誰かが気づいているはずなのに、と何の気なしに回覧板を開くと、一番上に手書きの紙が挟まっていた。その筆跡はひどく見覚えのあるもので、そうでもなかったら私はもしかしたら見逃していたかもしれない。
それは、旦那さんの手書きの手紙だった。

奥さんへ

ごめんなさい。最初から呼び名を間違えてしまいましたが、消すのもどうかと思うのでこのままにしておきます。
この手紙を、君が無事読んでくれていることを祈ります。この手紙を君のご両親だけでなく近所中に読まれでもしたら、僕はこの家を売り払って引っ越さなくてはならないかもしれませんから。
さて、ここからが本題です。
僕は、君と過ごしてきたこの２０数年、本当に幸せでした。たくさんの素敵な思い出をもらいました。そのことに、君にありがとうを伝えたかったのです。本来ならきちんと口で、顔を見て伝えるべきなのでしょうが、どうやらそれを君は望んでいないらしいですから、やむなくこういう形をとりました。申しわけありません。

だから奥さん。この手紙を読んでくれていることを祈ります。
たくさんの感謝をこめて。ありがとう。

手紙を読んだ私は、回覧板を抱えたまま、１３秒の距離を走った。そして旦那さんの家のチャイムを鳴らす。夜中に迷惑だろうか、と押した後に後悔したのだが、すぐに玄関の電気がついて、旦那さんが現れた。

彼の視線が回覧版に留まり、少しだけ安心したように笑った。

「よかった、引っ越さなくて済みそうです」

「旦那さん、あの、私」

「ここではなんですから、上がってください」

さりげなくエスコートされて、私は夜遅くに、と恐縮しながらも旦那さんの家へと招き入れられたのだった。

5話

「ずっと前から、君に避けられているとは思っていたのですが、今朝のが決定打でしたね」
紅茶を私に差し出しながら、旦那さんは苦笑した。とはいっても、あまり表情は変わらない。
「でも君は優しいから、あんなふうに手紙を書けば来てくれると思ったんです。打算的でしょう？幻滅しましたか？」
私はかぶりを振った。
「私の方こそ、あんな態度をとってしまってごめんなさい」
「いえ」
そう言ったきり、私たちの会話は途切れた。私は私でこのあとどうしたらいいのか考えているし、彼もまた思案顔だった。

ふいに、私の脳裏で閃くものがあった。
無理やりにでも彼を忘れられないのは、この思いがまだ心でくすぶっているからじゃないだろうか。はっきりと彼に告げることをしなかった。だからではないだろうか。告白をして振られてしまえば、少し前向きになれるかもしれない。
昔から私は土壇場の行動力には定評があった。そんな勢いだけで、私は旦那さんに声をかけた。
「旦那さん」
「なんでしょう、奥さん」
「私があんな態度をとったのは、傷ついていたからです」
「はあ」
不思議そうな顔で小首を傾げる旦那さん。少し可愛い。反則ではないだろうか。
そうは思ったが、とにかく喋り出してしまった私の口は止まらな

かった。脳の中では誰かが何かを一生懸命わあわあ言っていたのだが、私の口はどうやら脳とは別次元の生き物だったらしい。
気づいた時には、言ったあとだった。
「私、旦那さんのことが好きなんです」
目を丸くした旦那さんに構うことなく、私は一方的にまくし立てた。
「いや、気づいたのはこの前の夜だったんですけど、私、どうやらずっと前から旦那さんのことが好きだったみたいなんです。でも、私たち、離婚したでしょう？だから、早く忘れなくちゃ辛いなぁ、と思って、ずっとあなたのことを避けていたんです。そういうわけなんです」
そこまで言ってしまったら、なぜだかとてもすっきりした。ふう、と一息ついて、私は腰かけていたソファから立ち上がる。時刻はもう1時近くだった。両親がさすがに心配しているかもしれない。
「そろそろ帰りますね。遅くにごめんなさい。明日は土曜ですし、ゆっくり休んでくださいね。おやすみなさい」
「いや、あの」
「あ、ごめんなさい。一方的にまくし立ててておいて何って感じですよね。今言ったことは忘れていただいて結構ですから。なんか私スッキリしちゃいました。これからは避けなくても良さそうですから、安心してください」
にっこり笑うと、旦那さんはなぜだか憮然としていた。何故だろう。今全てが解決したはずだったのに。
「……奥」
旦那さんがなにやら口を開いた時、私の携帯電話がブルブルと凄まじく振動した。私は結構着信に気づかないことが多い。それゆえ

のこの振動なのだが、それにまたびっくりさせられてしまうのも事実。今日もまた「ひっ」と短く悲鳴をあげてしまってから、携帯電話を鞄から取り出した。
着信の相手は、お昼に連絡先を交換したあの男性社員だった。夜遅くに何だろう。緊急の用件だろうかと思い、「ごめんなさい」と旦那さんに断る。廊下へ移動しようとしたが、旦那さんが座って、というような素振りをしたので、頭を下げながらソファに再び腰掛け小声で電話に出た。

「もしもし」
『夜中にごめんね。今大丈夫かな』
「少しでしたら。緊急ですか？」
『いや、そういうわけじゃなくて、ほら、食事なんだけど―』

そんなに離れていたわけではない旦那さんには、相手の声が多少なりとも聞こえてしまっているようだった。珍しいことに寄せられた眉間のしわを見て、私はやはり失礼だった、と席を立とうとする。なのに、私の腕はいつのまにか隣に座っていた旦那さんに引っ張られ、私は旦那さんの胸に倒れこむような形になってしまった。思わず悲鳴を上げる。遠くで、彼の声が聞こえた。
「きゃ……！？」
『どうかし』
「悪いですが、今取り込み中なんです。また後日にしていただけますか？」
「な……！」
衝撃に目を白黒させている間に、私が手にしていたはずの携帯電話はいつのまにか旦那さんが持っていて、しかもあろうことか彼に向かって話しかけていた。
「ちょ、ちょっと旦那さん！何してるんですか！」
「まぁ、後日、があればの話ですが」

声を荒げる私を完璧に無視して、旦那さんは淡々とした声で電話口に告げる。
「聞こえたでしょう？彼女は、僕の妻ですから」
私は、その彼のセリフに、一瞬心臓が止まったのだった。

それからものの数秒で通話は終了し、結局私の手元に携帯電話が返ってくることはなかった。今はテーブルの上に鎮座している。とてもじゃないけれどそれに手をのばして、「じゃあ」なんて言える雰囲気ではなかった。

旦那さんが、不機嫌だ。
それの理由が、私にはわからない。確かに旦那さんの存在を無視して電話に出てしまったことはマナー違反だが、ここまでそんなことで怒るほど旦那さんは短気で細かな人ではなかったはずだ。
勇気を振り絞って、私は隣でソファに座る彼に「あのう」と声をかけてみた。
「旦那さん……？」
「なんでしょう」
やっぱり不機嫌だ。ここまで不機嫌だったのはいつ以来だろう。もしかしたら、婚約生活史上初めてかもしれない。いや、今は婚約していないのだけれど。
「なんだか、怒ってます、でしょうか」
「そうですね。多少」
認めた。潔いな、旦那さん。と少し感動する。私はこういうとき「そんなことないよ」と言ってしまうタイプだ。
「……それはなぜなんでしょうか」
「そうですね、細かく言うのなら、さっきの彼に4割、君に1割、自分に5割、というところでしょうか」
「そう、ですか」
相変わらず、自分に厳しい人だな、と思う。何より自分に怒って

いるだなんて。それと同じくらい男性社員が怒りの割合を占めていることも気になるけれど。彼はそんなに旦那さんを怒らせるようなことをしただろうか？

「釈然としていないようですから、ご説明しましょう」

「ありがとうございます」

なんだか補習授業のようになってきたけれど、この際気にするものか。昔からそんなに要領がよかったわけではない私は、昔から要領も頭もよかった旦那さんに色々と勉強を教わっていた経緯がある。なんだかそんなことを思い出して、懐かしくなった。

6話

「まずきみの同僚ですね。こんな時間に女性に電話をかけてきたこと。大した要件もなかったこと、などですが」
解説講義をはじめた旦那さんは、まずそんな言葉を口にした。
そんなことまで気にしてくれるなんて、なんて旦那さんは紳士なのだろう。本当に素敵なひとだ。
と思ったのだが。

旦那さんの様子が少しおかしい。眉間にしわを寄せ、どこか遠くを見つめて息を吐いたかと思うと、私を見つめ、そしてまた目をそらす。
それを何度か繰り返したあと、旦那さんは再び私をまっすぐ見据えた。今度は目をそらさなかった。
「……今のは表面上ですね。それ以上に、電話の相手が君だったこと、君を食事に誘っていたこと、そもそも君の連絡先を知っていることなど、が彼について腹立たしい原因です」
「は？」
なんだか方向性がおかしくなってきた。それは、あまり関係のない話ではないだろうか。
「君に怒っていた理由も似たような点です。君が彼に連絡先を教えたこと。彼の電話に出たこと。僕と一緒にいるのに、僕の知らない男と話していたこと。そんなところでしょうか」

これは、私の想像していた展開と、なんだか少し違うような気がしてきた。
私は、今まで彼氏というものがいたことがない。正直に言って、キスもしたことがない。だって、ずっと旦那さんがいたから。旦那

さんの方は、数人の彼女がいたらしいのだけれど、そんなことはこの際どうでもいい。私より１０ちょっと年上なんだから、そんなこともあるだろう。そうじゃない。今議論すべきはそうじゃなくて、これは、噂でしか聞いたことがないけれど、いわゆる……

「ヤキモチ……？」

「可愛らしく言うと、そんなところでしょうね。まあ、実際のところは、嫉妬、と漢字をあてはめた方がしっくりくるような気がしますが。独占欲、でも構いません」

私がおそるおそる聞いた疑問に、なぜか旦那さんは自信があるかのように（いや、本当に表情はいつもどおりなのだけど）きっぱりと答えた。

「な、なんでそんなに開き直っているんでしょうか」

「僕がそれらの感情を覚えたことが事実だからです。事実を認めない人間ほど、見苦しいものはありませんよ」

「そうですけど」

なんだか、旦那さんのイメージが少し変わった。丁寧で物静かなのは変わらないのに、どこか傲岸不遜に見えるのは、私の気のせいなのだろうか。

というか、独占欲にせよ嫉妬にせよ、一体どういうことなのだろう。

わけが分からない。だって私たちは「離婚」済みで、今私と旦那さんの間には何の関係もないはずなのだ。

もしかしたらアレかな。幼馴染であり、妹同然でもある私に対する気持ちとかなのかな。少し前までは婚約者でもあったことだし。花嫁の父とか、そんな心境なのかしら。

そんなことを私が思っているのだと旦那さんは見抜いたのかそうでないのか、どこか苦々しい笑みを浮かべて、また息を吐いた。

「まぁ、何より僕は僕に怒りを覚えているのですが。本当はこの前の夜に言うつもりだったのに、怖がって後回しにしてしまった。そのせいで誤解とすれ違いが起きてしまったんです。僕の所為なのに、僕は嫉妬なんてしている。そんな僕が腹立たしい」

ふと彼がうつむく。心配になって少しだけ覗き込むと、私は突然温かいものに包まれた。旦那さんの腕だった。いつのまにか私は旦那さんの腕の中に閉じ込められていた。

「奥さん。臆病で情けない僕を許してください。ようやく言おうと思って手紙を書いたのに、君にまで先を越されてしまった」

「許します。許しますけど、いったい」

ぐ、と腕の力が込められる。苦しいです旦那さん、と言おうとして私が口を開いた、それとほぼ同時に旦那さんは私の耳元で囁くように、しかししっかりとした声音で言った。

「奥さん。僕は、ずっとずっと前から、君のことを愛しています」

7話

「君のことを愛しています」

耳元で囁かれたその言葉は、私の耳をすっと通り抜けて行った。言われた意味がよくわからない。「え？」と聞き返すと、旦那さんは困った顔で笑っていた。

「しっかりしてください。いいですか、ちゃんと聞いていてくださいね。僕は君のことを愛しています。好きなんてとっくに通り越している。君が僕を好きだと思ってくれる以前から、ずっと君のことを愛おしいと思っていました。即物的なことを言えば、君を欲しいとも思っていました。僕のものにしたい、君と永遠に一緒にいたいとも」

驚きすぎて、声が出なかった。それどころか、すべての感情を表現することができなくて、私はひどく間抜けな顔をしていたように思う。

「それなら、なんで離婚、だなんて」

ようやく出た言葉はそれだった。

旦那さんは、きつく抱きしめていた私の身体を少しだけ離し、お互いの顔の見える距離でまた手を止めた。

「だから、なんですよ。このままでいけば、僕たちは結婚するでしょう。君は恋愛感情抜きに、それを当然だと思っていたようですし。それが、僕には我慢できなかった。僕は君のことを好きでしょうがないのに、奥さんに愛してもらえない結婚生活なんて、僕にとっては絶望だったんです。だから、心を僕のものにしてから、君という存在を法的に手に入れようと思った」

「それは」

「婚約を破棄して、恋人、ひいては友人、幼馴染という関係からやり直そうと思ったんです。当然何度もデートを重ねて、君が僕に恋をしてくれたら、プロポーズするつもりでした」
「だから改めるって言ったんですか」
「そう。本当は、ちゃんとこのことを伝えるつもりだったんです。でも、この前の夜、君は泣いてしまったでしょう？タイミングを逃したのもそうですが……何より、もし君にその意思がなかったら、と思って躊躇してしまったんです。結局、また次があると自分に言い訳して、先送りにしてしまった。その日から、君には見事に避けられてしまったわけですが」

ふふ、と旦那さんは自分を戒めるような難しい顔で笑った。私はそんな旦那さんの頬に手をやりながら、自分の気持ちを伝えようと必死だった。
「私は、あの日に気づいたんです。旦那さんのことが好きだって。でも私たちはお別れしたんだから、こんなの迷惑だって、遅すぎる、って」
涙が、こぼれていた。旦那さんはあの時と同じように無言でハンカチを取り出すと、しかし今回はぐっと自分の胸に私を押しつけた。ハンカチが床に落ちる。私の腕は、旦那さんのことを抱きしめていた。
「好きです。旦那さん。私、あなたのこと大好きなんです」
「僕もですよ、奥さん。誰よりも君を愛しています」

その日、私たちは明け方までずっとソファで抱きしめあっていた。今まで生きてきた２０数年で、一番幸せな時間だった。そう旦那さんに伝えたら、「僕も生きてきた３０数年で一番幸せな時間ですよ」と笑いながら言ってくれた。

週末で、本当によかったと思う。そうじゃなくては、なんとも味

気ない別れを迎えるところだった。私は顔を洗いながら、そんなことを考えていた。母に電話したら、心配するじゃない、とは少し怒られたものの、仲直りしたのね、とも安心した声で言われた。そのあと愉快そうに親とも思えないようなセリフを言われたので、私は電話を切ってやった。なんてことを言うんだ。そもそも、私たちは「まだ」だ。

「大きな声を出して、どうかしましたか」
「なんでもないです」
「そうですか。それならいいんですが。あぁ、これ、僕のですがよかったらどうぞ」
「ありがとうございます」
差し出されたパジャマを手に取る。今から家に帰るのもあれだし、今夜は一睡もしていないのだし、これからお昼頃まで眠ろうということになったのだ。この唐突さというか、不思議さというか、が旦那さんらしいところだと思う。
「では、着替えてきてくださいね」
「はい」
「……僕の両親が使っていた部屋ですから、ベッドは二つあります。安心してください」
「そっ、そんなこと不安に思っていたりしません！」
「そうですか、残念です」
愉快そうに口元を歪められ、私は自分の顔が真っ赤になるのを感じた。旦那さんはこんな人だったろうか。
「もう遠慮する必要はありませんからね。このくらいいいでしょう？」
「構いません！」
「いっそのこと、僕のベッドで二人で寝ましょうか？」
「いいですよ！」
売り言葉に買い言葉、という言葉を思い出したのは、笑いをこら

えるという世にも珍しい旦那さんの表情を見た時だった。

「ねぇ、奥さん」
「なんですか」
「これからは、たくさん、気持ちを伝えあいましょうね。二度とこんなことがないように」
「……そう、ですね」
私は今、旦那さんのぬくもりに包まれてベッドの中にいる。
本当に、夢にも思わなかった状況だ。眠ったら覚める夢のようで、少しだけ怖い。
「愛しています」
「私もです」
それでも、この囁きはきっと現実だ。私はそう信じている。

そこで、ふと疑問に思ったことがあったので、小さく口に出してみた。
「……あの、旦那さん。私これから旦那さんのことなんて呼べばいいでしょうか」
「今まで通りでいいんじゃないでしょうか」
旦那さんは、くす、と小さく笑う。抱きしめられていた私は、またそれを見逃した。
今度は、リクエストしてみよう、そう思いながら、目を閉じる。
「どうせ、すぐに本物の夫婦になるんですから」
「それもそうですね」
「おやすみなさい、奥さん」
「おやすみなさい、旦那さん」

・・・おわり

7話（後書き）

ここまで読んでくださり、誠にありがとうございました。

これがはじめての連載小説でした。
感想もいただいて、うれしい言葉をかけてくださって、本当に幸せです。
これからも精進していきたいと思います。

「奥さんと旦那さん」につきましてはこれで完結となりますが、
番外編や後日談も出来たら書きたいと思いますので、
そのときにはまたお付き合いいただけたら幸いです。

ありがとうございました。

アレナ拝

課長と部下とその後輩（前編）（前書き）

「奥さんと旦那さん」本編の、旦那さんサイドを第三者から。

課長と部下とその後輩（前編）

別に、課長のことをそんなに気にしたことなんてあまりなかった。
でも、ヤツが。俺の後輩のアイツが、ふいに言ったから。
「課長って、付き合ってる人とかいるんですかねー？」
そういや俺は、あの人のことを何も知らないな、と思っただけなのだ。別に、胸がきゅっと締め付けられるような痛みを覚える理由はないはずだ。うん。

今まで生きてきたなかで、これほどまでに「ミステリアス」という単語の似合う男はいないと思う。
俺の課の課長。
俺の４つ上。電車で通勤している。独身。それくらいのことしか知らない。
顔はそこそこで、身長もそれなりで、物腰は丁寧で、すっごく穏やか。表情はあまり動くことはないが、無愛想というわけでもない。そして仕事が出来る。後輩の指導とかもうまいし、上司ともその性格ゆえなのかぶつかることはほとんどない。あまり人と深く付き合うことがないが、それにしても職場の仲間としてこれほど好条件な人も珍しいだろう。

そこまで分析して、俺は後輩を見下ろした。俺も身長だけはある方なのだが、その上コイツはものすごく小柄なので、かなりの身長差が出来ることになる。コイツが俺と話すとき、一生懸命ぐい、と背伸びする姿はなんだか見ていると微笑んでしまいそうになる。そんな自分の頬をひっぱたきたい衝動を押さえつけながら、後輩へと疑問をぶつけた。
「なんでそんなこといきなり聞くんだ？」

俺の問いに、後輩は「なんとなくですよー」と笑った。照れたように見えたのは、気のせい、か？
「だって、課長ってプライベートが謎じゃないですか。でも女の子から人気有るし、どうなんだろーって思っただけです。ほんとそれだけなんですよ？」
「ふーん」
なんとなくそうとしか言えなかった。態度が悪いかとも思ったが、彼女はあまり気にしていないようだ。少し安心する。
「女から人気あるんだ？」
「知らないんですか？すっごく人気ですよ。バレンタインとか、みんな牽制しまくり。課長も笑顔で受け取ってくれるし、本気のコとか結構いるんです」
「そんなヤツ本当にいるんだな」
男の俺から見てもモテそうだとは思ったが、そこまでとは。うらやましいを通り越してなんだかちょっと可哀想になってきたぞ課長。モテすぎて辛い、なんて俺は思ったことはないけれど、本人としては真剣な悩みなんじゃないだろうか。
そこで、昼休みが終わった。俺も後輩もおしゃべりをやめて、デスクへと向かう。
課長はすでに仕事を始めていた。

その日から、何の気なしに俺は課長の観察を始めた。
別に、アイツが課長のことを熱心に見てる気がするから、とかそんなんじゃない。何の気なしに、なのだ。いいところは貪欲に見て覚えようという俺の向上心がなせる業だ。

翌日の朝、課長はなんだかやけに考え込んでいる様子だった。表情に明らかな変化があるわけではないが、それでもいつもより若干眉間にシワが寄っている気がする。

そんなことを考えながら午前中の業務を終え、昼休み。食堂に向かう途中、エレベータ内で課長と、事務の女の子が会話しているのが聞こえてしまった。
「今日ですか」
「はい。両親の結婚記念日なんです」
「それはおめでとうございます」
「今日は家族で食事に行くんですよ。記念日なので」
たったそれだけの会話だった。特になにもひっかかるところはなかったはずだ。しかし課長は、よりいっそう眉間のシワを深めたかと思うと、数秒後、いそいそと携帯電話を取り出しポチポチ打ち始めた。
そこで食堂に着いたので課長の様子は分からなくなったのだが、昼休みが終わり自分のデスクへ戻りつつ課長を見ると、さっきまでの思案顔は消えうせ、代わりにどこか嬉しそうな顔でパソコンに向かっていたのだった。
そしてその日は、遅くまで仕事をしている課長には珍しく、定時でオフィスを出た。しきりに携帯電話を気にしながら、少しばかりの早足で。

次の月曜日、課長にはたいした変化は見られなかった。

その翌日、課長の顔色は少しよくなかった。

そのまた翌日、課長は憔悴しているように見えた。

「なんか、課長、具合悪そうじゃありません？」
「……ああ」
後輩が心配、と呟く。また原因不明の胸の痛みが俺を襲う。その痛みには気づかないフリをして、俺は課長を見た。デスクのパソコンに向かって手を動かす課長。もしかしたら今までの俺ならこれま

でとの違いに気づかなかったかもしれない。多分、ずっと観察してたからわかったのだろう。
仕事の悩み―というわけじゃなさそうだ。それなら、プライベートの悩みか？
プライベート。課長とあまりにミスマッチなその言葉に、なんだかおかしくなった。でもやはり課長の疲れ、困惑し、そして悲しげな瞳を見ていると、なんだかこっちまで悲しくなってくる。
課長のそんな様子は、それから毎日続いた。

一週間後の木曜日、残業途中でトイレに立ったとき、あいつが廊下の向こうから走ってくるのが見えた。
「おい、何走って……」
声をかけようとして、言葉を切る。
アイツは俺の横を走り去っていった。

アイツは、泣いていた。

課長と部下とその後輩（後編）

「課長」
廊下の先のラウンジで、コーヒーを見つめる課長を見つけた。顔を上げて課長が俺を見る。「ああ、君ですか」とかすれたような声で言う課長は、やっぱりどう考えてもおかしかった。

「なんか、最近元気ないですよね？どうしたんですか？」
その言葉に、課長は少し驚いたような表情をした。しかしすぐ、曖昧に笑う。
「大丈夫ですよ。先ほど、違う方からも言われました……そんなに僕疲れてるように見えますか」
「見えます」
違う方……アイツか、と思う。彼女は泣いていた。課長は何を言ったのだろう。
「課長。悩みあるなら、話してください。聞くぐらいしか出来ないけど、楽になるかもしれないですよ」
「……」
少しの間黙って、そしてそのあと課長は柔らかく笑った。見たことのない笑みだった。こんな表情も出来るのか、と驚いたとき、俺はあることに気づいた。俺は、この人の何も知らないのだ。どんな人なのか、どんな考え方で、何が好きで、何が嫌いなのかも全部。

「職場のひとにそんなことを言われたのは初めてですよ」
俺が今までのことを思い返していると、課長はそんなふうに言った。遠い目をしていたが、悲しそうな目ではなかった。
「僕の性格なんでしょうね。あまり人と仲良くなることは得意ではありませんでした。それに、あまり仲良くなろうと近づいてきてく

れる人も多くはなかった」
それは、俺が先ほど気づいた事実を指摘されているようで心苦しくなった。この人と仲良くなりたいだなんて思ったことは一度もなかった。
課長はそれを見抜いているのかいないのか、俺を見つめて少しだけ笑う。
「それを苦痛だとは思っていなかった。僕には幼馴染がいるんですが、その子はまだほんの小さなときから、僕と一緒にいてくれて、話をしたり、出かけたり、食事をしたりしてきました。僕のことを知ろうと質問をしてきてくれたりもしました」
「はい」
「その子とすごす時間は穏やかで、僕にとってかけがえのないものだったんです」
「はい」
俺は、知った。課長の気持ちを。だから、言った。
「その子のこと、好きなんですね」

「愛しているんです」
柔らかく、大切なものを慈しむように、ほころばせた表情。
そして、次の瞬間には苦笑いをする。

「なのにね、失敗してしまいました。元気がなかったのはそのせいだと思います」
「喧嘩でもしたんですか？」
「そんなところです」

弱気な課長は、らしくないと思った。俺がこの人の何を知っているかと問われれば、何も知らないのだけれど。けれど、こんな課長は課長じゃないんじゃないかと思ったのだ。
「課長」

「はい」
「伝えたいことは、伝えるべきです」
俺を見て、課長は黙る。俺は一体何を言ってるんだ。この人は上司だし、人間的にも俺より数倍できている人間だ。でも、俺はこうとしかいえなかった。
「後悔しないでください。課長の気持ち、素直にその子に伝えてあげてください」

「そうですね」
ふ、と課長はまた柔らかく笑って、ありがとう、と言った。そして、今度はどこかからかうように瞳をきらめかせる。
「でも、僕も君にまったく同じ言葉をお返ししますよ。君も、素直になった方がいい。自分の気持ちを後悔しないうちに伝えなさい」
「な、」

いたずらっこみたいな表情。
俺は、この人と仲良くなりたい、とそのときに思った。

「よ」
「……先輩」
屋上にいた彼女に、後ろから声をかける。彼女はすでに泣き止んでいたが、鼻と目が赤かった。ぐすり、とすすり上げるその様子に、俺は笑う。
「ひどい顔」
「うるさいですよ」

「課長に振られました」
「知ってる」
「え、なんで！？」
屋上で、背中合わせにベンチに腰掛ける。ややあってぼそりと言

った後輩の言葉に即座に返事すると、彼女は驚いたようにこちらを振り向いた。なんで、って。そんなもん、お前の様子見れば誰でもわかる。いつも、お前のこと見てたんだから、当然のように。

でも俺は何も言わなかった。

「課長、好きな人いるんですって」

「ふーん」

全部、知っているけど。俺は何も言わなかった。

「あーすっきりした！」

彼女は、まだ赤い顔をぐし、とこすって、晴れ晴れとした顔で叫んだ。その顔は本当にすっきりしたような顔だった。小柄な彼女が精一杯伸びをする。

愛しい、と思った。

ほほえましいとか、そういうのじゃなくて。胸の痛みも、もう無視するのはやめた。

認める。認めます課長。俺、コイツのこと、好きだ。

だから、ちゃんと言います。後悔しないように。

次の金曜日は、課長は何かを決心したかのように俺に対して笑いかけてくれた。

そしてその次の月曜日、課長は本当に嬉しそうな顔をしていた。

課長の左手薬指に銀色の指輪が光ることになるのは、まだもう少し先のことなのだけれど。

「課長と部下とその後輩」おわり

課長と部下とその後輩（後編）（後書き）

番外編終了です。
いずれ、本編および番外編の後日談を投稿しようと思います。
読んでいただきありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7529y/

奥さんと旦那さん

2011年12月1日23時55分発行